



最終バツター



まるど88

最終バッター

なにわトーケイズという野球チームがあった。トーケイズは、存亡の危機に立たされていた。この10年間、5位が3回、6位の最下位が6回、去年はもう少しで11年ぶりのAクラスかと思われたが、最終戦で敗れ4位。親会社は当山(とうやま)健康フーズという、健康食品の会社だったが、このシーズンを最後にスポンサーを下りることになっていた。それに伴うごたごたで、シーズンも終わりの9月、突然監督が交代した。今まではフロントに歯に衣着せぬ物言いで、筋を通してきた大村監督から、「人情の溝口」といわれる溝口監督に代わっていた。人情の溝口になってから9連敗で、最下位を独走していた。はや9月の半ば、5位の楽天との3連戦、今夜も負けると最下位確定である。

7回裏が始まる前、トーケイズのパフォーマンス、ライオンの着ぐるみが数名、球場のはげた芝生の上で寝転んでいる。ライオンといえばあの西武ライオンズのほうが先輩で、トーケイズは後発である。当山健康フーズ、略してトーケイズ。たまたま名前が同じ、むかしの外国のグループ、トーケイズのヒット曲は「ライオンは寝ている」で、寝ているライオンのパフォーマンスとなったようなのだが、それを器用に日本語訳したバンドの歌が、大きなスピーカーから聞こえてきた。それによると、ライオンはまだ寝ている。しかし、今に起き上がるのだ。見ておれ優勝のふた文字しかない！と力強く宣言し、そのときに寝ているライオンの着ぐるみが、むくっと起きだすのが、7回裏のパフォーマンスのお決まりだった。だが、優勝？いつ起きあがるのだろうか。

今日も観客席はまばらだった。相手が5位で最下位争いというのがあるにせよ、ホームゲームでのまばらな観客、10000人収容の小さい球場とはいえ、半分も入ってるだろうか。身売りの話が出るのも致し方なかった。ここは小さいので、ホームランがよく出るという評判である。

このトーケイズのテレビ中継を熱心に見ている初老の男、一朗太がいた。ひょんなことからケーブルテレビの売り込みに来たセールスマンを断れず、契約してしまい、安月給のうちから貴重な4千円を毎月払いつつ、それでも、地味なトーケイズの試合など、普通のテレビ番組ではめったに見れないが、ケーブルテレビではしょっちゅう見れた。それで、いつまでたっても下っ端から上がれない職場のストレスの解消になっていた。負けてばかりなので、ストレス解消に役立ったわけでもないが。

7回裏の攻撃が始まった。1対1、今日こそライオンは起きるのだ。打順は8番の権太(ごんた)から。「権太行けーっ！」テレビにかけた掛け声も虚しく、セカンドフライで1アウト。9番はキャッチャー安藤。打率1割5分と、期待できない。案の定見逃し三振。1番に帰り、G大平。G大平はとつぜん化ける選手である。ファウルで粘り、フォアボールを勝ち取った。2番、今季このチームでいちばん打率がましな鴨井。それでも2割4分2厘。これでいちばんましのかと、一朗太は思う。3ボール1ストライク、チャンスだと一朗太は、手に汗を握った。と、相手ピッチャー則本の牽制球で、1塁ランナーのG大平が、塁に戻れず3アウト。

試合は終わった。8回表に楽天は、1アウト満塁から、先発小倉に替わったピッチャーの坂田が、松井稼頭央の走者一掃タイムリナーツーベースと銀二の2ランホームランで5点を失い、トーケイズは6対1で完敗した。「なんで松井に打たれたあと、坂田替えんかったかねえ？いつも遅いわあ決断。もう『人情溝口』いらんっ。大村監督のほうがよかったのに。……いや、一緒か」ぼやくつつ日本酒を口に流し込み、テレビを消した。

最上のチームは最下位に沈んだ。明日は工場に行きたくないと思いつつ、夜中まで、きのう買った日本酒の一升瓶をコップに注いで飲んでた。たまたまスーパーで一升瓶を買ったのだった。いつもはそんなに大酒は飲まないのだが、つい、60になってもうだつの上がらぬ自分に嫌気がさし、夜中の3時まで飲んでしまい、目覚まし時計をかけるのを忘れたのだった。気づくと携帯に、数通のメールが入っていた。職場の上司や同僚からだった。同僚からのメールも、心配しているというより、何をしてるんやみたいな非難めいたものが多かった。一朗太は、上司だけに本日体調不良のため、休ませていただきますと、返事をした。頭が痛くてそのまま昼過ぎまで寝てしまった。午後4時ごろ、のそのそと、古ぼけたアパートの階段を下り、外に出る。

電車で2駅行くと、たしかバッティングセンターがあったはずだ。長いこと行ってないけど、気分転換に、行こうと思った。なにもない田舎町の駅だが、あの辺りだけ、店が固まっていたはずだ。工場の仕事で心も体もいっぱいだったので、何年も足が遠のいていたのである。10分歩いて、たしかこの辺だと思ったところは、飲食店が何軒もあったのに、草ぼうぼうの空き地になっていた。バッティングセンターだけが、建物が残っていた。そのバッティングセンターも、木の扉が潰れかけている。そばにコーヒーと、お酒の自動販売機がそれぞれあり、お金を入れたら出てきた。日本酒と缶コーヒーをズボンの後ろのポケットに入れた。さらに、千円札でウキスキーの小瓶を買ったら、100円玉のおつりが何枚も出て来た。しかしこんな何も無いところでなぜに、自動販売機だけは、まともなのだろう？

木の扉を押してみたら、ギーと鳴って、中に入れた。1階部分は食堂になっていたが、がらんとした空き部屋になっていた。大きなテーブルが5、6個あり、椅子は撤去されていた。厨房のほうに、大きな鍋が、数個、ごろんと転がっている。天井近くに蜘蛛の巣が張っていた。

埃の積もる木の階段を上った。みしみし音が鳴る。階段が崩れないか心配だ。たしか2階に、バッティングセンターがあったはず。

あった。しかし、埃のたまった木の床の上、廃墟となったバッティングセンターに、夕日が当たっていた。埃を手で払って、ベ

ンチに腰を下ろし、おもむろにポケットからたばこ缶コーヒーを取り出す。いままでの人生の61年、夢は持っていた。人に使われず、気楽に一人でできる商売をやろうとしたが、さっぱりやりかたがわからなかった。高校時代の知人にそんなことを相談したら、一緒に商売やろうということになったが結局、お金をだまし取られた。工場を幾つか変わったが、どれも覚えが悪く、よく怒られたし、仕事を楽しいと思ったことはまるでなかった。

そんなこんなことも、人っ子ひとりいない、夕日に染まる田園風景を見ているうちに、なぜか、懐かしい気がした。中学、高校の周りの連中はみな、結婚し、子供、そして孫までいた。ひとり者の一朗太にとっては気まずかった。ここは大阪市とはいえ、はしっこの田舎なので、知り合いばかりで困るのだった。そこで同じ大阪市の、別の町に引っ越したのが、今の住所というわけなのだった。今日は缶コーヒーと煙草が、ばかに旨いな。ふと立ち上がり、ドアを開けてバッティングセンターの打席に立った。紙くずが何枚か落ちていて、錆びたピッチングマシンは動きそうになかった。が、はんぶん冗談で100円玉を入れてみた。そうしてそばに転がっていた金属バットを急いで持って待ってみた。と、なんよピッチングマシンは動いて、ばねの力で一朗太に向かって球が飛んできたのである。と思ったら力なく転がり、ころころと、一朗太の前まで転がって、止まった。あと9球も、似たようなものだった。立ち小便して、おしっこが力なく出てくるみたいにしょぼしょぼとボールが出てきて、ころころと転がって、一朗太の前まで届かなかつたりもした。ボールが地面というか床というか、を転がってやってきても意味がないのだった。なんだか、いままでのおれの人生やな、と思うとなんだか腹が立ってきて、せめて、このバットで人生いままでのぶん、跳ね返すぞと、意味もなく思った。

100円玉を入れたところのそばに、目盛りのついたつまみがあり、それが何かわからないまま、一朗太はつまみを右に、思いっきり回した。年月のせい、硬くて、右に回して、ちょっと左に戻そうとしたが、動かなくなった。と、錆びた投球マシンから、見達えるほどの速球が、飛んでくるのではないかと。びゅんびゅん速球が飛んできた。一朗太はなんとかバットを出してみた。いかん、速すぎて当たらない。ズボンの後ろポケットから日本酒を取りだして、口飲みしたら、気が大きくなった。豪速球のスピードが怖かったのに、酒のせいで勇敢になった、ような気がした。ストレートが飛んでくる。危ないっ！もうちょっとで頭に当たりにかけたのに、酒でフラフラしながら、へべれけで、打席に立つ。次の球も、危ない！インハイ、内角高め。

つぎも、来た！機械がはんぶん壊れているせいもあり、妙にカーブになったり、急に落ちたりして危なっかしかったが、それがまた、酔った一朗太には、面白かったのである。

何球目かにまぐれか何かか、一朗太の振ったバットは、豪速球を捕え、白球は、この、はんぶん壊れた練習場の建物の庭へ、ころころと飛んで行ったのであった。

「や、やった、やったあ！」

誰もいないバッティングセンターで、ひとりしやぐ一朗太。そのときふと、誰もいない、誰も見てないところで黙々といい仕事をする、というフレーズが、想い出された。たいした当たりではなかったが、嬉しかった。

このバッティングセンターで、生まれ変わろう。一朗太は持っていた100円玉すべて、6枚を入れた。

玉は故障のせいもあってなのか、いろんな方向にやってくる。インハイ、アウトロー、アウトハイ、一朗太はすべて空振りしつつも、面白くてしかたがない。お尻のポケットに入れていたウヰスキーの小瓶をぜんぶ口呑みして、気合いを入れて打席に立つ。こんどこそ、こんどこそ打って、あいつも、あいつも見返してやるのだからさっさと！

最近上司に怒られたり、同僚にシカトされたりしたことが、酒を飲むほど鮮明に思い出され……。くそうっ、独り言で延々と、上機嫌になったり、急に大声で怒ったりしながら。ふらふらしつつ打席に立つ。ひとり、なにわトーケイズ、最後の打者に成り切った。草ぼうぼうのバッティングセンターで。

よしっ、いける！直感が走った。顔をピッチングマシンのほうへ向け、歯を食いしばる。ホームランだ！

内角高めの速球が、一朗太の頭に。

ポカーン！

『危険球ピッチャー退場！いしゃ、いしゃ、いしゃをよべっ！』

悶絶した一朗太は、まるでスローモーションのように、地面にゆっくりと、倒れ込んだ。コーチも監督も、選手も観客も誰もいないところで、密かにいい仕事をしていた一朗太は、しかし、これでいいのだと眠りについた。

(終)

最終バッター

<http://p.booklog.jp/book/109765>

著者：まるど88

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/marudo88/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109765>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109765>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ